mini知識

干潟生態系の保全と創造への取り組み
生きている化石“カブトガニ”の保全

カブトガニ類は約2億年前から大きな形態的変化をしていないことから、"生きている化石"といわれており、現在世界に2属4種が生息しています。"カニ"という言葉がつくことから、蟹の仲間に思われがちですが、分類学上はサソリ類に最も近縁とされています。

日本のカブトガニ（*Tachypleus tridentatus*）の生息地は内湾の波の穏やかな浅海で、瀬戸内海と九州北部の一部に生息しています。そして、広大な干潟と砂浜が接していることが生息の条件になります。これは、砂浜は産卵の場、干潟は幼生の生育の場として重要となるからです。しかし、瀬戸内海では干潟の干拓と水質の悪化などにより、カブトガニがみられる場所はごくわずかとなり、九州北部の生息場は佐賀県、長崎県、福岡県、大分県のごく限られた場所になっています。佐賀県の伊万里湾では、今でも産卵期になると産卵に来たカブトガニがたくさんみられます。

現在、日本国内に生息する成体のカブトガニは2,000つがいほどに減少したと考えられており、環境省レッドデータリストでは、「絶滅危惧I類(CR+EN)」に、また水産庁のレッドデータブックでは「絶滅危惧種」に指定されています。

カブトガニの生息場を保全するためには、産卵場である砂浜と、幼生の育成場所である干潟をセットとして考える必要があります。特に、カブトガニの幼生は干潟底質の選択性が高く、シルトから砂泥状の底質には若齢の幼生が、砂質が強い底質には3歳前後の比較的大きい幼生が生息することから、物理環境面で多様性に富んだ干潟が必要になります。また、餌料環境からみた場合には生物学的にも多様な生物が生息するような環境が必要となり、地域の総合的環境を保全することにつながると考えられます。

カブトガニの生活史については、特に成体の行動や生息地域間の交流の有無など解明できていない点も多く残されています。そのため、岡山県笠岡市にあるカブトガニ博物館では発信機による成体の行動を調査するなど、各地で研究が進められているところです。

当社でも、カブトガニが生息する干潟の監視調査業務（国土交通省「生態系調査」、平成7年度より継続）を受注し、カブトガニの産卵・幼生の監視調査を実施しています。

カブトガニの生活史

●7～8月の大潮期の満潮時、砂浜で産卵。
●上がオス、下がメス。

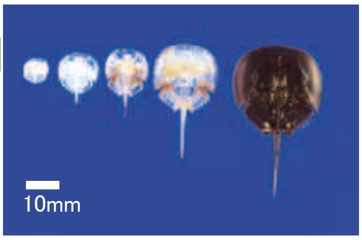
砂中に産卵された卵（卵径は約3mm）

約40日

●孵化までに卵内で4回の胚脱皮を行い、卵径は約7mmになる。

●砂中から浮遊する1齢幼生。
●潮に乗って干潟へ拡散する。

●2歳までは、プランクトンや微生物、それ以降はゴカイや二枚貝などを食べる。
●3歳前後まで干潟で生活し、その後浅海に移動。



1～4齢幼生の脱皮殻と5齢幼生

●オスは15回、メスは16回脱皮を繰り返して成体になると推測されている。
●寿命は推定25年。

（生物多様性グループ　岡村哲郎）